今若草山ハ春日三笠山のならびにあり是より笠置山まで四里あり

軍兵共。四方に余蘖をさしむけくり。長岡兵部大輔藤孝（是ハ細川家の中祖にして又ハ播磨守元常といふ）是を歎きたてまつり。いかにもして援けまゐらせんと。種々工夫を回らすに。摂州石山本願寺ハ三好三人の導師なりけれバ是を恃んで宥めんと。火急に事を計らひけるに。光佐上人異儀なく諾き。三人衆を説るといへども。三好の評議まち〱にして軍の進退決着せず。長岡今ハ片時も早く南都に到りて守護せんと。藤孝獨悄々地に一乗院へ忍びいり。京都の騒動を告てまつり。いかにもせよ三好の殺害を逃れんこと必定なれバ一先此山を落させ玉ひ。藤孝一個御供して。若草山を越させられ。其より笠置の岩洞へ籠り。江州矢島に落玉ひ。和田伊賀守惟政の許へ入御なさせまつる。偖松永ハ覚慶を弑しまつらんと勧れども。三人衆これに一同せず事延引に及びしかバ。久秀大に憤り。今ハ他人の援助ハ用らじ。我一門にて起兵なさんと。南都へ殺害を向させしに。覚慶南都にはおはしまさず。何方へ落させ給ふや。御行衛を知るものなし。是に因て松永弾正三人衆を深く恨み。此密謀を漏せしも三人のうちにもあらん。此后渠等ハ恃まじとて。河内住人亀山次郎宗政を語らひ。三人衆を滅して自己一個に柄を執り。畿内の政務を知らばやと思ふに。三人衆も三好義継を大将とし。四国の将佐を従へ。三好山城守康長（長慶の叔父入道笑岩と称）篠原右京進長房（甜雲の子）備と一隊になり。阿波の御所より松永退治の御書を請受。大軍をもつて踏破らんと。泉州堺へ推發し。松永と合戦しけるが。久秀大に敗北して。多門の城へ逃退く。明れバ永禄九年の春また泉州にて軍あり。其後又戦へども。松永再三打負。既に方便の盡るにや。去歳の冬より三好家と倚りて和睦せり。これに倚りて合戦ハ漸く止ぬれども。三人衆の驕奢なる事以前に勝りて主人を軽んじ。放逸の事のミ多かりしかバ。松永ハ窃に是を喜び。虚もあらバと窺ひをりけり。然れども阿波